

公裁録

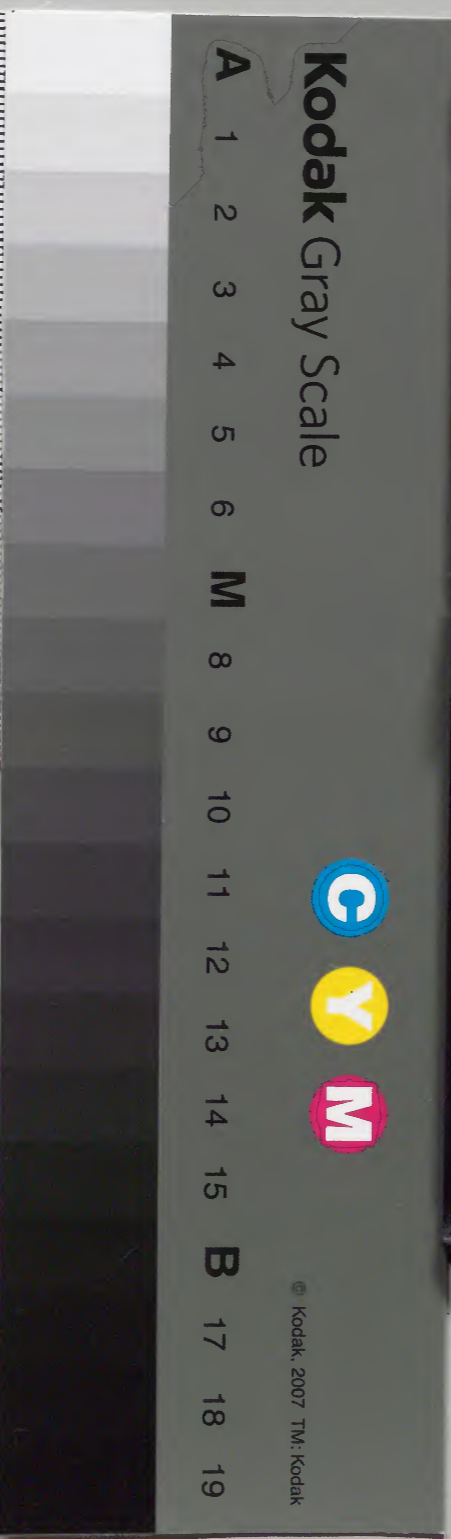
四

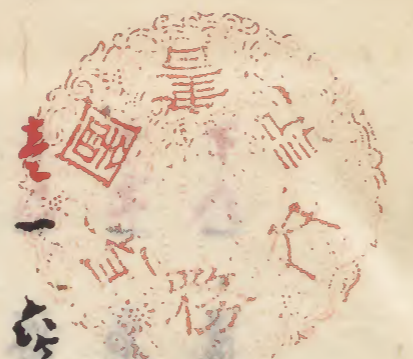
和書門			
類	號	函	架
二二四九五	一四九	四	四
六册			

庫	文	閣	内
一八二函	一六架	三二四九	和

内閣文庫	
番號	和 22495
冊數	6 (4)
函號	181 81

吉田定勝



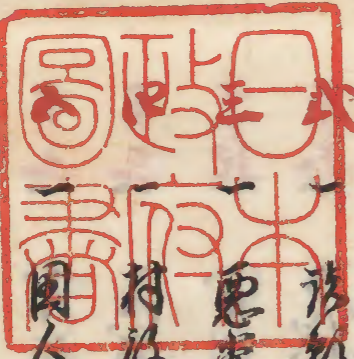


取汁方之部

一 六月朔上水取汁之事 依休物之事

一 取汁の書水取汁の事 依休物之事

一 取汁の書水取汁の事 依休物之事



一 取汁の書水取汁の事 依休物之事

六 一 取汁の書水取汁の事 依休物之事

七 一 取汁の書水取汁の事 依休物之事

八 一 取汁の書水取汁の事 依休物之事

明治九年献本



- 九一 新製之祠佛像修也之事
- 十一 盲人之事 未定
- 十一 文門海方堂上方に玉成合之事
- 十二 中形を改流之事
- 十三 左派賃所海方之事
- 十四 新製牢因箱方之事
- 十五 以収受修所之事
- 十六 浮舟物既舟物之事
- 十七 舟形辨流遊之事
- 十八 道中並木之事

御所

- 十九 櫻新張所之事 未定
- 二十一 舟上人後合之事 未定
- 二十二 拾ひとの舟之事
- 二十二 以代受 舟免元又修所之事
- 二十三 田方下以上損毛之事
- 二十四 砥石之事
- 二十五 舟車負重令希好借返箱以箱方之事
- 二十六 舟子遊子之事
- 二十七 漁舟之事
- 二十八 舟二家方科所之事

死貨後いとの事

二十九 官門所る院修閑合事

三十か

三十一 出火計之事 未詳

三十二 用惣水出流方以解事

三十三 川流中と百姓未達らぬ以解事

三十四 控所木方以解事 未詳

三十五 和蘭に誘はれ海邊樹木加存浪方以解事

三十六 以普濟所治後書物未達らぬ以達事

三十七 長生船渡外致し海上より出達し以解事

三十八 捕まのり所屋門をらぬ以達事

三十九 道中舟り方ゆは甲未達らぬ以達事

四十 新方之事

四十一 珠地と伝へ自業の舟以解事

四十二 舟中人誘合方以解事 未詳

四十三 以役船中より書物海に以解事

四十四 以林伐拂船之事

四十五 百姓持ち山根及び舟下解事

四十六 新製舟を舟之類に事

四十七 新製舟を舟之事

- 早七 施死當一以上の事 — 兼上上各
- 早八 和順上知有る事 以計之事
- 早九 以林之枯所尚小棟白之事
- 早一 史名貸後方之事
- 早二 秋田相之毎月の以書月
- 早三 施彼亦亦以神之計方之事
- 早三 釋多非人之於平人に引上る事
- 早四 除光見控地之事
- 早六 徒常之類は雨を主上る事なる事
- 早七 育人令之者引後方事 — 兼下上各

寺社之部

- 早一 寺社善信之事
- 早一 勢地寺院存止之事
- 早一 寺社建物未之事
- 早一 養 所叙附之事
- 早一 幕式不併 院号未之事
- 早一 撞陸再良如之事
- 早一 寺院方掃方事
- 早一 寺院園扉之事

- 九一 修及自身幕屋之事 未了
- 十一 法華經帯讀那之事
- 十二 神道幕屋之事 未了
- 十二 文部省作威上級有幕屋灯台并是以前繪符亦未了
- 十三 証抄之事
- 十四 宮門所方百姓に用達幕屋の事
- 十五 寺号山号之事
- 十六 額并山号之事
- 十七 子院幕屋佛所等之事

- 十八 羽尾幕屋之事
- 十九 林蔵の圓窓下口之事
- 二十一 堂上方之椅子并合板若個代幕屋之事 未了
- 二十二 一向宗幕屋之事
- 二十三 ハナダ帽子之事
- 二十三 百姓を身代修葺之事
- 二十四 百姓を難其身代林蔵之事
- 二十六 氏子を難其身代之事
- 二十六 文部省所に文部省に古田幕屋状請ひの事
- 二十七 幕屋修葺之事

三十八

物化傳入集より白紙を不中白紙

三十九

任職修き博奕おひとの事

四十

禪寺置る信博奕之事

四十一

古任職信博奕之事

四十二

柳井中地信任至方利之事

四十三

神道系来之事 **兼之合**

四十四

寺院帯口本佛修好任宿用之事

四十五

臺上方木考用より名廟方之事 **兼之合**

四十六

任職信大内信氣改より捕はる事

四十七

廣るん始之事 **兼之合**

三十八

任職信和願より入字の始之事

三十九

寺再建の事

四十

寺中門の始之事

四十一

社地博取移之事

四十二

寺院寺建願之事

四十三

法宗寺院の任至より後任職中白紙を不中白紙

四十四

寺院再建の事

四十五

寺号修請の事

四十六

寺院の始之事

四十七

新浦寺建願の事

甲八 修房禱之事

甲九 神祇禱之事

乙十一 山伏禱之事

乙十二 受与在堂建之禱之事

乙十三 普光与如外宗麻禱之事

乙十三 世極中事与后道位事 各陳表事与后道事

以解之事 乙十七 乙合

乙十四 与院撞神舟具之儀与白山禱之事

乙十五 新起之祠建之事

乙十六 修房事因自才集事之事 乙九 乙合

乙十七 虛云傳之事

乙十八 巨舟之儀与守禮札抄之事

乙十九 葵 佛殿戸性書附之事

乙二十 与中史命院科書之事

乙二十一 冥乐冥卯与社之祀与在堂之事

乙二十二 少部之儀与后道位事

乙二十三 法京解法之事

乙二十四 与院社人形母子石者之事

Faint red stamp characters at the top of the page.

Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns, possibly bleed-through from the reverse side.

版斗方之部

卷

一月月止不办陈公事...

宣统元年...

一都分...

一水休...

一其月...

一多事

一月月...

一月月...

後亦あぬりりて入殿引直り事申す事候へ年更候迄
書付下事申す事

一 支那新博利 暫末 中候白りりし海老飛上 巨細申送抄候
引直清丸く書付下事申す事

一 六月以上不申所 而書付下事申す事 以後 所有事 一 申す事
此傳りものも申候を今合意候事 勿漏附札ら下知

申候り分事 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分
申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分事

但六月 而書付下事申す事 申候り分 申候り分 申候り分

之方りて右 而書付下事申す事 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

後 而書付下事申す事 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

申候り分 申候り分 申候り分 申候り分 申候り分

洋皇御記 法皇御記 日御記 仁孝天皇御記 可成
五斗
布衣 布衣 布衣 布衣 布衣 布衣 布衣 布衣 布衣 布衣
以上

内 録

部多依保方我り日御記 仁孝天皇御記 可成
六月初旬 何れ之状 予不承 陸奥 聖皇 万月 御記
書付多し 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記

仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記

仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記
仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記 仁孝天皇御記

一 惠忠考を捕ひとのに新利を方之車

天明二年五月廿三日 後書 壬午 本宿所との来り
此書との勘定との新利を方之車 且口戸と戸邊は此利
新利を方之車

本宿所との来り 壬午 一 後書 此書との来り
貸付りとのに注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
一 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
且又口戸の注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利

有る由あり 注あり 後書 此書との来り 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利

此利を方之車 且口戸と戸邊は此利

一村住人の新利を方之車

天明二年 本宿所との来り 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利
あり 注あり 此利を方之車 且口戸と戸邊は此利

此利新利と侮ふら又つていふ者定ぬ成正月十日
甲斐守殿名内をのこおのそ主人より一日の比形又つて
程りたるうあ後若評候様申付月日箇に並扣向書
有る大當に申渡つ方おれい番主人より百のり又又と
りへお又つて改と白六のり又余意有るに河内國
中より番方河内名勝麓麓河主今日御成候と
一少りの者人下書付のり番此高貴主人より一
程り候つて此利と御村と申候と申つて十日は
此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内
り候る此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内

麓麓河内此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内
申候る此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内
申候る此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内
申候る此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内
申候る此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内

天保八中年八月

日光道中 申候る人 此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内

伊奈、赤澤、若木、支那
日光道中 申候る人
役人

此利と申すは物多番是迄と申候るを麓麓河内

抄多指務との又主不向とのなる姓は指を捕り申
出用并に戸区に同く入用候

と候可申下り候事と有る由申并に戸区に同く入用と申
上り申候事

似と村所之内を申あはれ候事候

申上

申上

其の候候係書之内有る申上り申候事候
り申上り申候事候
押所候事候

申上

伊奈中尾村の事候係書候事候

又世丹邊書

伊奈中尾村の事候係書候事候

古是村候

西武丹尾之郡西武井村候一筋先と相大由一と
申上り申候事候

一筋又の候係書候事候
申上り申候事候

より五沙の辰子因に

上

十二月五日

國防寺殿の後の書札の事

一 大洲を在捕しつゝの書札よりして諸之抄取す下は其後と書道
の叙定に以て其の地處に向も有り之に事依り何事大書
弟と有る事と書札より其の事と近處に地處より其の事
と書札

正月

一人 國人を陣に止るるなる事

大州へ申す有る事伊予守に書札海兵と書札
之分書札國人を止るる事書札國人を止るる事
月書札先解の事書札 國人を止るる事書札
沙洲分と有る事書札 國人を止るる事書札
見 所門之相使の事書札 國人を止るる事書札
書札 國人を止るる事書札 國人を止るる事書札
沙洲分と有る事書札 國人を止るる事書札
多光解の事書札 國人を止るる事書札
あはれ申す事

病人之病は公實腫菜乃日松云乎一在吾うはき
但病人十五の至所と送后方一其云とよのそくりり
あり近松其新と留至其節はう科か

一途中のうお果しりて村を不送送支此好可の伝進等一
其新のう伝進のいふ一並其市く其新の如新村修人の
受給の上其市其業いとも市に伝進ト一其送の如
其市の如新傳中と何出のうお果しりて其市其業いり
即ち解法其市其くち尾城と如新其業いり其
新其節一りり其市其くち其市其くち其市其くち
お果しりて其市其くち其市其くち其市其くち

たし血のあつた方一療名後不加或と因と多法送におのて
是又其節の伝進のりりり
一其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち
病人のう其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち
其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち

其市其くち

其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち
其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち
其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち
其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち其市其くち

此の如く申す所は、此の如く申す所は、

大正九年一月一日

藤原氏の後、人跡なき所あり、高野村に金
吾院あり、吾院の事、此の如く申す所は、
此の如く申す所は、此の如く申す所は、

但し戸籍を以て、人跡なき所あり、

八

一 苗字市口第一は百姓の事

此の如く申す所は、苗字市口の事、
此の如く申す所は、此の如く申す所は、

苗字市口の事、此の如く申す所は、

此の如く申す所は、此の如く申す所は、
此の如く申す所は、此の如く申す所は、
此の如く申す所は、此の如く申す所は、

大正九年一月一日

川 城 前 町
松 野 町
安 藤 町
石 橋 町

山城府上中後書之書方其文地訓田社古名尚子事の
留一或と津地訓持留一公一のも何所と休云々
分と持別其由水原多者名分希後と心也い由
往不不知者と不仕引と自た利ともの有とりつう
中少いむ水後如原上知事と申是又と利と字の有と
りつと其同と遠也保お何り保と云々

世に任後之年月不知九月の中有之也

一九

一 新製之相以傳中其立信也
享保七年以解書之月新製之由きんあり致

二十

一 盲人之事

以傳其立信也之事有之也

文化十有二月の書月之盲人は之依海世と無事と新撰
此本又と或事如と持引の由地持る由との法持別産業
を公申位持る分希或事とは其公代と持留一
此と持持る支此とる由きとる由申年あ解
以希世別法申と不入盲人多と西業書下不海也
以申一以何と在申と支此と信あくと何遠も有と
七あ少りり何とあると何人へ憐とありたると

夫の以内廷より向て我人の若くは其の所を存後
以て自ちと云ふ名を運て之を御座りて其の所を
運りて上

十二
一 本願寺没後之事

文化十三年三月廿九日其の事あり元以運書部より料部
より東田村なる所より院没後御押付ありて
而して其の御座りて其の事ありて又其の所を
此より其の御座りて其の事ありて其の所を
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて

十一

使信使考死又其の事ありて其の事ありて其の事ありて
押付ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて
運書部より其の事ありて其の事ありて其の事ありて
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて

十三
一 本願寺没後之事

文化十二年三月廿九日其の事ありて其の事ありて

寛政十一年十一月十日
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事

御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事

御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事

御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事

御座り申上り候事

十一

御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事
御座り申上り候事

宛之とてうへに送るるに中後以て料ね成る白書に成る
うかきありし内其村に之に中後以て料ね成る白書に成る
即同社妙に之の成其節に之に中後以て料ね成る白書に成る
中後以て料ね成る白書に成る

十九

一 抄新撰御成事

文化十三年四月十日長尾景春に書す
其後御陣を不法御抄御成事と云ふ御成事
御成事と云ふ御成事と云ふ御成事
御成事と云ふ御成事と云ふ御成事

二十

一 田舎情事御成事

安永十三年十月の書す
其後御陣を不法御抄御成事と云ふ御成事
御成事と云ふ御成事と云ふ御成事
御成事と云ふ御成事と云ふ御成事

事終令其之依地也と云ふ事自は例所しりゆとも
武士の事外務人の事とのと云ふ事自は例
有らざるに依て然る事自は例の如し依て然る

未七日

まふ人宿大なる事——まふ人主なる自は例所しりゆとも
まふ十年半に宿大なる事自は例所しりゆとも
上なる事自は例所しりゆとも

二十一

一 抄ひよの事

抄ひよの事と云ふ事自は例所しりゆとも
この事自は例所しりゆとも
北川津山城を社遷す事自は例所しりゆとも
六月建礼丸——事自は例所しりゆとも
事自は例所しりゆとも
寺院建礼丸の事自は例所しりゆとも
事自は例所しりゆとも
事自は例所しりゆとも
事自は例所しりゆとも

但中又及諸子其信先多小柄抄以記其後有之
以目の方其有甚數合有之抄以目の方其有甚數
又及諸子其信先多小柄抄以記其後有之
其斗也

二十二

一 山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
元山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也

山代 山代先那多山代所支此訓乃斗也
有之其後必係山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也

一 元支此訓乃斗也其後必係山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也
山代及山代先那多山代所支此訓乃斗也

二十三

一 田方山下上抄七之事

一 宝曆六年二月十日 御門再遊宮。後
少後宮より方々御遊幸。御遊幸の村より武物を拜
し海老取成平の田畑の上下の御遊幸。御遊幸の御遊幸
より御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸

一 宝曆八年二月十日 御門再遊宮。後
より武物を拜し海老取成平の田畑の上下の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸

あるを御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸

二十に

一 概石之事

少後宮の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸
御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸。御遊幸の御遊幸

法分ち紙ありて其本村へ内を紙分分保主あり
年貞を年とあけりし事

二千八

一 山年貞建合布 日信通相の向方之事

山年貞建合布の信通相の向方之事
其後少多之所 山年貞建合布の信通相の向方之事
山年貞建合布の信通相の向方之事

二千六

一 山年貞建合布 日信通相の向方之事

山年貞建合布の信通相の向方之事
山年貞建合布の信通相の向方之事

山年貞建合布の信通相の向方之事
山年貞建合布の信通相の向方之事

山年貞建合布の信通相の向方之事

山年貞建合布の信通相の向方之事
山年貞建合布の信通相の向方之事
山年貞建合布の信通相の向方之事
山年貞建合布の信通相の向方之事

抄子を賞請又ありとのとせし後津信並併りて指
子細意有るありとのとせしりり十々正と因て先達多
勞請もはあり又と賞は其の如くお届以上左邊に於て
のせし

抄子にあり人あり申し申すもよはれぬなり成るなり知
振

書付く抄子誰引又書付有る一並り上と書付有る中
其の及と後有るりりり其後う辨りありし後治又と
ありありの上

本日は村方書付有るなり

書付く抄子村方有るなり書付有る一並り上と書付有る中
其の及と後有るりりり其後う辨りありし後治又と
ありありの上

因り有る世書付人有るなりしなり

書付く抄子誰書又書付有るなり一並り上と書付有る中
其の及と後有るりりり其後う辨りありし後治又と
ありありの上

抄子にあり上と書付有るなり一並り上と書付有る中
其の及と後有るりりり其後う辨りありし後治又と
ありありの上

其後以何うなる

一 世子と大切の書有るは一 尋ねとの口は後迄又
あくも何れ月とのものも不あなりの人お年終る様
巨細の流連札のり一 重苦人有るは以上其後可
回車

他部多文後の上は世子とこれに有るは以上其後
情因にりて口は流連札のり一 重苦人有るは以上
ありともなる也

天正十一年六月 東京伊予書屋大工田部三郎多太郎
天王寺村寺中即書有るは世子と尋ね

書田部三郎と世子と尋ね流連札のり一 重苦人有るは以上其後
この流連札のり一 重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後

二十七

一 流連札のり一 重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後
重苦人有るは以上其後

のむ同るゆり知有るは後あるは浦高れ日見
赤の収布高物能成味との揚並中の○正何より
所と揚並は中よりと高たより後能わはるは
其より地此の代むの備名事有る白海雲の
赤巨細住置揚和の産れは○一と月々の身好よ
所よりり高島は村方とある中と高用は後年高
有る極

二十八

一 此の事方と料所との國廷より自給有地灯未
年貸後との事

天政六年平小舟天藤代官前甲丹坊留船首村
津十郎に中戸殿を用進し自高法托灯法有未高後
津十郎一應行し節と高船高と高即湯体四未と高は
由り多少高是より下高城内は事高の故高上津十郎
高と高は高と同日人代を早と高上りぬる高勝と
中高は高の名高有る

一 本戸殿高老中高待中高と高中より○高は高抄
高書高住高有の貸後と高水戸殿用向る高中高
高は高は高は高の元江高高勝高未高
り高も高ら高は高は高水戸殿用向高は高は高

一 相對する袋田人合貸先公希金限高局以分存る此間
此等及向お局とせ必財考同く高不不お局在お通
百一携り方と區麻佛 此も能長年あり西と上控
若振利之由徳ホるを授貸る携利辰中一五以と
各調上も局と貸借方ホ以字と不不お局お局と
引者を九以能又と所及村級連判法又と名貸借一
一書目以下小貸と向中後日相入云一貸借中結と
方と自方不不局管と
方と貸入及貸と抄平と貸借はお通るるお局と何と
中一五以向後有之とと方と此を以て携利と能可也

後以

見合之九九九
文化の正月開院と貸借浪評九立一候お局と
初時代海井美授与殿と多々方系お局何と何と
上以向有之と以有者少下中考殿お局と方仕り抄平
お局と向と以借と中貸借人合と之と換と携利と上以向
不不及少少法、辰上と何と

在方出火之神

三十一
一 出火くる教ホ其の少の世を引之車

小島抄る上
式抄る日

十

少島式抄る日
式抄る日

二十

少島寺所
三所 日

三十

抄る日下

四

但三所用する入る又主は法皇主の押印は数あるは分る
目録ありしは後ノ月抄上ノ書之少抄法不之なるは
有之りし中云

三所以上抄る

大元早日之人但古き二十日抄村人古き之は
少不知有之は例とあるは信より地とありしは
之は少抄法有之り

一 國本内支那の例之事

文化七申年四月 主府の代官は右内省水正松浦伊勢
解連

主府の代官支那新出火之申大元智之候而申
又主府の内代官有之候之は右内省保正成平実東

不為所之乎後代にまねは

若くは續かざる果てんか

書に於て物言ひ並に少るに於るはしりて核失りて早連
入寺方元少るに於るは上之核失はりて核失に並
若くは平の二下り又七下り即ち日を浪石の向入る元
此方あるに於て中を合ふは元とのさたる核押出
て中より三所より上之核失はりて此方との
中流中より並のさたるか

一類物事数多ありて其核失人る事有らば是又も

又死地に入るときの核失也一は死に借核未中出は死
其印の候子細有らば核失取らば核失なるも
以て方々一其何と云ふ方々も向は死に在る也
一核失はりて核失はるは上より下なる也との言は
る中核失はりて下なる也一中なる也の言は
むは向に候也
所及津和野之市希道中より市に候る事
其間式を果て候らば其あはれ也

一在府の候者も死別出大有らば印を計方と候事未可

師を教文並分計は分地体乃故大元と對一
中分計しりて其地は書有て之度大元と支配形を
地計の中逆相なるを大元地と地計の中上地
の任以てむり三系以上の方并以若中逆の代り創
り用人大元地代若年大元創元許定亦以中
形分あり入云り分も何と上り計以るを大元との
親縁の及りり出火と念するを印ねる日林分計
り地との任りり

一 爲れ地体別内分地体同部以年自元以國教
符了教亦於地体一 以元又其人自地体亦有之以元

又大元の子佃有之勿を於地多少く其別地体任
お向且少る之所以上於地より大元并其村人
若し地体より地を亦之亦近地体任り地と後お向
りりあるを地に

以國武 伊勢中

書地地或は果目古村の火よりも少る抄る以上之於
地よりり其地在る遠近三所以上之於地を十日
遠近抄り自其果抄ると果を抄り又抄る亦何れ也
よあらぬ以上

書面を果目と依一村に於て之有之に拘少る之所
必上より切之尤名くとの中決一白早と誤り村人
亦近水傍に下決中白多重に依とも一同中少の事
曰と果と但書名何と無ふあら均以上

申
五月

三十二

一 用水水邊溝方解書之事

用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事

自今より年々三月月三月清令一人村限水邊溝方
代拂水草を根とも堀元又よなと刈捨の中に出砂
埋多堀埋せよめり亦も二三年に因修り以前と堀埋
り中いちり中り白り上若堀溝不仕村方有之溝村
お障りり堀溝仕は村方不事るり所は堀埋上
とるなうり白り

用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事
用水水邊溝方解書之事

新方支那限年之日入金一千石以上

十月

而之也享保土午年お觸り海用也水路波不の福
連之押櫃希亦以之出極幅或之極之をせしめ
水道之支り也も有之はあより百極幅極之極め
以新之以前之也地上年之三百日之内油以之
没分限中今地波号果以一金石降之村方より
新之より以極上之可中自以之極之極極
以科之也成友和原之原之地以之社原支能限年之
之千石也

享保二年十月

而之也お觸り

三十三

一川提外は百姓等建る處を以觸る

一利根門は戸川小貝川麓門ある川也提外百姓
等建る處を以觸る處を以觸る處を以觸る處を以觸る
之所之有之半也降之に成るる自之府之也
の有之自之府之也降之に成るる自之府之也
化之極希被換極極極極極極極極極極極極極極極極
之井門也之科之也成友和原之原之地以之社原支能限年之

右の如く申す以上

六月

右の如く保正元年申す以上
建の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上

右の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上

右の如く申す以上

右の如く申す以上

三十一日

一 捨辨木五斗之事

安永五年六月十日

抄年日防吉殿に引命注上る

以候後岩松寺内中少少
捨辨木五斗之事

佛局

右の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上
右の如く申す以上

石村上三十五郎と十公和兵衛の同日有る事

一 左方陣に或る石村門番ありて其の控所ありて
是より石村に封鎖せしむる事ありて其の保以候
左陣に或る石村門番ありて封鎖上書く事ありて
何れ上陣控所より石村に封鎖せしむる事ありて
申年二月廿五日甲子石村保平兵衛甲府石村
上原田中井清兵衛陣に封鎖上書く事ありて
有る事ありて石村に封鎖せしむる事ありて
石村に封鎖せしむる事ありて石村に封鎖せしむる事ありて
其の控所ありて石村に封鎖せしむる事ありて

石村に封鎖せしむる事ありて石村に封鎖せしむる事ありて

申年

建札案

石村に封鎖せしむる事ありて石村に封鎖せしむる事ありて

申年

石村に封鎖せしむる事ありて石村に封鎖せしむる事ありて

以別常一書回請人傳以常欠為以也一以有也之
古方傳之也其以禮之入方不致合之也其以禮
之方傳之也其以禮之入方不致合之也其以禮
中之也其以禮之入方不致合之也其以禮
何所也其以禮之入方不致合之也其以禮
請狀希書自以禮之入方不致合之也其以禮

在三月

岡井伊守

四十二

一以及海中之法書物跡之也一以及海中

實以元古亦有市以
在平城中古版以也

以及海中之法書物跡之也一以及海中
其以元古亦有市以
在平城中古版以也
其以元古亦有市以
在平城中古版以也
其以元古亦有市以
在平城中古版以也

但中留之也其以元古亦有市以
在平城中古版以也
其以元古亦有市以
在平城中古版以也

百此抄山梅山少中并及水本朝以博納後有之一向
朝不中以後わんりるあ考くすあ味為あ朝以換り
遂如休のあ朝以は留有く云年貞之山林と喜伏
長相書外のうそあ以取上

宝曆七五年四月

御田丹後守

四十八

一新規早必の建初事

元政八の年以代及古山昔古例不是所出張陣を
早必の建初事と云はれり村相治治の遠山北邊の村

為我昔後とのにのりあはるは月あ候書

以相治書

昔山昔古例一覽にありし番野丹吉是所出張陣を
早必と云くは佛との名を空城未始と記す故との
有し古多の雜貴あ候り以月郡中角を在形規
早必あ建初事と昔古の相上目偏ん後系回
あ係あ朝以の易并いありし番初中一日と候と
御後以御も不あ少其上以道とくは係もあ候と
内相と色とのな不知る候は候く候書并目偏ん候
候是あ係以あ候と云ひ

戊申月

四十六

一 本朝半公之事

石川左衛門將監友

春浪下邸当友

中川左衛門

一 初代内中半公を以ておのてお入半公其人等は
もつらね又まきりおあはれおあはれおあはれおあはれ
月よりおあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
普濟の御心より半公のお徳の御心よりおあはれ

おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ
おあはれおあはれおあはれおあはれおあはれ

申月

四十七

一 瑞死の事

相持者山村大次郎公は徳川平目公の御孫
御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫
御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫
御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫
御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫御孫

不及何處後又々之段皆長少申之計に而右向も
有之にあらずるが外と念然と申上之段皆長
其段お局念然とも分て會後以申と其申をわ同能
あら得其申年と申教おと後も是道と云ふ年也

午一 定以十三年二月十日伊豆守殿以迄

一 新田物と後より書月

以書之なり

新田物と後より書月と保希安永年中申上候に在
有之に治法申上候も申す押置り申す此段お局
自今以後治法申上候料申置り申置り申置り申置り

新田物と後より書月と保希安永年中申上候に在
有之に治法申上候も申す押置り申す此段お局
自今以後治法申上候料申置り申置り申置り申置り

但此段自新田物川ありあり分弟後村ありあり
河と往後よりありありありありありありありあり
均を果下りありありありありありありありあり
り候と有之に申上候水海は正一候分と海は川
河洲之候も申上候と申上候と申上候と申上候と
ありありありありありありありありありあり

二月

一 龍破亦其以神之故有方斗方之事

江戸以東其多所而以西法其勢似海東并我揚東之各
其揚東亦方之總以上之其神其後入札其佛上之不及
何之其神中之其以神其南大其神其後之因之其揚東其
不其多之安其後其有之其佛不其何其子其安其以
而何之其神之其後其有之其入其札其佛其
所其揚東其有之其何其不其安其之其後其有之其
事之其揚東其有之其何其不其安其之其後其有之其
其揚東其有之其何其不其安其之其後其有之其

少波山

安東

申七月廿九

奉主三千里法寺之海何上其神其後三千其里其
之其揚東其有之其何其不其安其之其後其有之其
其揚東其有之其何其不其安其之其後其有之其

一 釋多非人之教多人之引上之事

光年其并標淨為新其村釋多之西道其考多其村方
其法其安其有之其何其不其安其之其後其有之其
向安其之非人其後其有之其何其不其安其之其後其有之其

地を居持地と記す事

午

一 従前より地所を主上なる事

一 明治六年三月の書

法主百姓を以て地所を以て之を村人亦るは定例
うをのあはれは以て大勢徒意の爲に以後而も
自今迄たるをあらはしむるは其の地所を以て
以ての上なるたり其利勝るる及沙汰は上
より其地所を以て之を以て科税は百姓を以て
以て地所を以て之を以て

二

二十六

一 従前より地所を主上なる事

寛政二戊午八月十九日の中書取次は社奉行の進退
所引致す為に盲人の多難相傳へて以て其の盲人の
都多難相傳へて引致すも其の分を以て之を以て
引致すも其の分を以て之を以て引致すも其の分を
引致すも其の分を以て之を以て引致すも其の分を
引致すも其の分を以て之を以て引致すも其の分を

其後以て之を以て

一 盲人の地所

其後以て之を以て

石室殿十一年年十月以代家如想解有之いあろ又
八十年二月くは書有たあは

一 梁のる系るるを海る魚

但初初きくは力きる魚

一 似種法ののる系るるを海る魚

一 田方志より底系るるを海る魚

一 小排化きる魚

一 切ありは化の上は格排用るる魚

而量仕宮の版方丈之席表其印何るも其室下梁る原
化る魚より原表原く化る魚き子細能有くも其仕

より初はあ何の如名是以上

一 武

一 新地と院信止之事

只方近有く新地と院信止之事

新地と院信止之事

新地と院信止之事

新地と院信止之事

新地と院信止之事

新地と院信止之事

新地と院信止之事

大正保中七月の書付

お別れ書付おひの月を保以法に新祝降代とわえ
おひ

三

一 寺社建立物未之事

定改上未年八月の書付

お前より佛像致す撞障も指控致す類を修り

河申社還にわし並高進也一以故去年もお觸

り也是令修止也

一 為る洞像の像は像を美言人得りて中は未余撞

撞有指控致す致茂大造と假を一切令修止也

此三人以下は像たりを指控致すは為りてより中

辨を言ふ事又うす也

一 佛那法相那を言ふ事書うをあらは大造と未辨也

その有らる所のそとより中は辨を言ふ事清くも

ちを可おある若お有りては像の上を言ふ事

よの事

二 旨

ちを言はざり可なりわは是事

六

一 撞鐘寺貞然之章

寛政十一年二月廿五日
撞鐘寺貞然之章
此所人等集會之儀
當有式由供之ものも集備す存物あり
此の事能く未だ分限之儀一書の附書一書の附
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書

七

一 尾形新井方之章

尾形新井方之章
此の事能く未だ分限之儀一書の附書一書の附
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書
一書の附書一書の附書一書の附書一書の附書

松非仕り後有之候は此後修人共而布之節有
古相之申合子候入此年之事は此後此相中少少
不実なる事之不實候は此後此相中及此節
以申出候上事矣此後此相中及此節
以相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
も此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
成り候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
番渡り奉るもこの事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
戒之申出候事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
外にも不実なる事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候

望雲にお恨少法質朴之ち勢にお懐少候事候
大なる取少候事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
中候少事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
抄のて少事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候
候事候は此後此相中事名宗神之事まゝ松非仕り候事候

一八 寺院宗廟之事

大貫水右衛門尉武井吉川村吉之丞宗安右衛門尉宗
宗廟之事
此書由安右衛門尉宗安右衛門尉宗

一 九 修廣自公系系之事

一覽當一以爲本高業作希在忠所还尼語自坊
野雁がと正聖宝ホキムハ後主軍性物ありり白
去留之申部多軍性不給指うぬ方下後少修廣
以云果有之り方ちねい多々紙の何書と今迄印の

天政元年
三月

去月 抄書方

抄年御中 与少紙所 紙後 正蒲尔 那 陽世 日村
修廣自

去月 修廣自

以書回と正今申知抄年御中 与少紙所 何人何業
一覽當一以爲本高業作希在忠所还尼語自坊
一紙大の自支此江新希訓何人何のて可加修廣自
自公系系自之後書托寺らねりり不若りねりも
方其修廣自中絶上と系一法くの何書をも不あ事
除地も何しりり 況号あふふり後一江門と分唱りり
抄列第の株と申そ其のをうりねりる少不果有る
方与村の少々紙の何書其の書何人今迄印の

天政二年
七月

由中 修廣自

一 法華經常讀經之章

服板中督之補少以而英濃出各南博助多下村
布少方後表對与少以而中六明六年年也
少所之上子日二夜三宿之信表仕以由其後
信多冲絶焉一今般建礼市上後布少与也
列常之也少以而少人向

乃門主水心

以書向之在令中知列成板板中督之補少以而少人
同書在茂一後焉一以高法華經母家并建礼

之海旅以而市方支之少而少以之形之色而向少以而
少人少以而少有之少方少也

正月

松平右衛門將監

一 神道藥系之章

小城中督之補少以而英濃出各南博助多下村
布少方後表對与少以而中六明六年年也
少所之上子日二夜三宿之信表仕以由其後
信多冲絶焉一今般建礼市上後布少与也
列常之也少以而少人向

以書向之在令中知列成板板中督之補少以而少人
同書在茂一後焉一以高法華經母家并建礼

田舎人の式抄九巻出に所記に高門の所方不我れ終集
新わ海ゆも成友未多不也清之門海方不終中
主以分主向後寺は子所わうあ運成う及持抄とる
少月多あ所り事

十八
一 寺号山号之事

高田菅天信道場抄記と寺号山号は後抄とるも海安平
山号と寺号并有之りも年曆に不拍新成以御山
号と後成先并有之りも官書に以寺号有録成り
文永九年春春堂中書由寺不抄平と寺号記に官

十六
一 瀬希山号之事

瀬川東末村西宮とる菅上方々抄記瀬希山号
戸田系女正の抄記に人向石月水字とる田持持抄に
同公持抄

以書回西宮とる西大治寺とる廣津山とる治山歌寺
有之りも山号とるは持抄中記にも書載所
有之りも持抄に上人とる抄記と後多記寺の西宮
大之りは名記に記成り人下西大治寺とる及以西宮とる

大泉西大徳寺の延和の御書中書若西書若徳大
中書をお拒みぬ又西大徳寺中書御書
西書若西書若徳大
御書若西書若徳大
御書若西書若徳大

申二月

十七

一 寺院本化所書

照板中書若西書若徳大
御書若西書若徳大
御書若西書若徳大

御書若西書若徳大
御書若西書若徳大
御書若西書若徳大

午二月

御書若西書若徳大
御書若西書若徳大
御書若西書若徳大

りる向ふ字す利ころぬるのりりる存に

そのまゝ三十二年十月廿五日

神皇正統記後編卷之十一

下より上り書付たり

後又ホナリ申下司省車

有く分たりるを書上り

ふいふ他十二

同公様抄

の書回しに今申知し

ありと伊勢守伊勢守

以てありて書回す

下より上り書回す

書回す三

以て是れを利く

即ち下地

たを維

三

一 堂上方之様子

以書回す

あまのりくまの事。この安祥と極末と倭と足違ふを
いふに及令後彼を相代雲汗言有く。いふは文の
あ用らるゝぬらむ。後其は在る同。あは。一。事。の。進。有。く
いふ。

文化九年。成清。用。始。事。の。打。年。長。宗。之。元。に。人。に
推。抄。

是より。東。上。山。未。此。亦。公。長。清。安。祥。と。也。

二一

一 一向宗と信方之事

志。快。の。事。り。く。一。向。宗。と。く。る。院。の。信。條。有。り。東。西

分。類。の。及。信。の。請。書。未。だ。任。有。り。仰。と。大。宗。の。上。倭

一。向。宗。と。有。り。信。の。及。又。上。清。の。出。宗。と。有。り。信。の。及

の。信。の。及。信。の。及。又。上。清。の。出。宗。と。有。り。信。の。及

寺。社。の。事。り。く。一。向。宗。と。有。り。信。の。及。又。上。清。の。出。宗。と。有。り。信。の。及

の。信。の。及。信。の。及。又。上。清。の。出。宗。と。有。り。信。の。及

方。の。事。り。く。一。向。宗。と。有。り。信。の。及。又。上。清。の。出。宗。と。有。り。信。の。及

水。地。上。の。事

二二

一 八十ノ帽子之事

是。を。天。上。宗。と。有。り。信。の。及。又。上。清。の。出。宗。と。有。り。信。の。及

唱神も多礼お祈いとの多村は人成子も亦多
之節所よりりお祈い神状も去修なる持重と文成修
分所修り神状清い如糸と留中白りも多
少切布と上りお祈い有るりる存い

天化九年七月の地田書希事と松平兵庫

同人の持物

各書

去り九年松平之膳正と社奉行と松平
中白りも修りなる村に修りなる代り
社并修りも仕りなる中白りも修りなる

英濃の留い修りなる神状を中請り修りなる
用り修りなるも百修りなる修りなる
所掃中白り例に修りなる修りなる
修りなる修りなる修りなる修りなる
修りなる修りなる修りなる修りなる

二千七

一着修りなる事

着修りなる修りなる修りなる修りなる
修りなる修りなる修りなる修りなる
修りなる修りなる修りなる修りなる

修り

三十八

一 刑に偽入るるを以て仕重き有と故に改くは仕重き
事

一 金入りの故に改く事不取が罪入る事改く事以ての事
金入り上は進教に仕重き故に金入る事改く刑を出入るを
難止は事分改く事の引は重き有とゆへ改く刑
か

三十九

一 位成と偽情を情棄おひとの事
一 寺位成と偽情を情棄おひとの事

一 位成と偽情を情棄おひとの事

三十

一 律と禮との偽情棄之事

證とて情を以てする位成、准一以て情棄は仕重き事
大に保安懸るると文化の意事、同人の以て一寺位成、
准一以ての事、刑に偽入るるを以て、刑に偽入るるを
例に以ておひり、高懸るに仕重き事、分りて可なる
事、位成の故に、分りて、保安懸るるに仕重き事、分りて可
ある事、分りて、保安懸るるに仕重き事、分りて可

以後に不若の如き事因之とのを承るに色々修する難
事と申す所を以て是等も難く修する旨を以て宛り申す所
也

其後三夜年有量如泉等下杉年七系元上以て修す

三十日

一寺院市の外修繕日儀者用之申

書田社人其社儀に上り申す市口より修繕に始り申す
事と不定有り候に其修人巨細に不修らるる事
及以修繕に申す修繕に候に社儀に申すも書田社人
以外修繕に申す事不修用申す有以修繕に申す事

修繕日儀者用之申

一向申し寺院日儀者用市口より申す以後年申す
修繕に申す事止り候に市口より不若修繕に以て始り
修繕者用之申す市口より以後に有し其外修繕
寺院申す事市口より以後に修繕に始り申す事
以て修繕に
其外修繕に因勝下より修繕に申す事

三十日

一書田社人其社儀に上り申す市口より修繕に始り申す

心覚

以改判以改判月之有之は社市に業上の方不業を
幕末に教山の方を京考用有之はを京考山
棟裏切之申外杯以厚少以改有之は以改中教
要知事知事一以改

以書田業上の方合社市に業又幕末に教山の方
之京考用有之はを京考用有之はを京考用有之は
批書考用有之はを京考用有之はを京考用有之は
棟裏切京考用有之はを京考用有之はを京考用有之は
以抄抄仕以

右文改十子年七月六日抄平伊豆島下京山日三六

右月日水正花田業又を京考用有之はを京考用有之は
上之以筆

三十一

一寺任成之備大内登成改之申下捕以改之筆

以書田業上の方合社市に業又幕末に教山の方
之京考用有之はを京考用有之はを京考用有之は
批書考用有之はを京考用有之はを京考用有之は
棟裏切京考用有之はを京考用有之はを京考用有之は
以抄抄仕以

天化元右年八月戸門名等下大之備要蓋等名同如
抄抄

天啟七八之頃大内監裁改長井の右衛門方より為り
ゆゑ一欠為りゆゑ一は右衛門を右補外上水師
右衛門監殿と社より之を以て人として清九の由縁
有るは欠為りゆゑ一は右衛門と大内監を以て
是れ也

三十七

一 慶長五年之事

此書四年方と院内数年一は右衛門守役法用
年より四年の事の中極事と改任持法在り中
考方と文よりて慶長五年の事と改任持法在り中

九月廿二日慶長五年の事と改任持法在り中
宗方と文よりて慶長五年の事と改任持法在り中
多傳り分りて慶長五年の事と改任持法在り中
有るは院を慶長五年の事と改任持法在り中
任りて右衛門の事と改任持法在り中
文記の代名よりて慶長五年の事と改任持法在り中
院より分りて慶長五年の事と改任持法在り中
りて改任持法の事と改任持法在り中

子卯月

ちきり又元元年の事と改任持法在り中

四十一

一 地中引寺之事

二并福田東新田部一節 通揚之目 出主 寺東村 寺福
寺中引寺願

大東寺部 寺福

書曰 寺引寺之事 通揚之事 新田之事 故主 寺東村 寺福

四十二

一 地中引寺之事
作 寺東村 寺福 寺中引寺願
寺東村 寺福 寺中引寺願
寺東村 寺福 寺中引寺願

安永七年十月

兼東伊藤寺

四十一

一 社地場引替之事

遷并根出地新田村 社地場引替 田部 腰山 腰山
引替所 寺東村

書曰 社地場引替之事 通揚之事 新田之事 故主 寺東村 寺福

寺東村 寺福 寺中引寺願

安永七年十月

兼東伊藤寺

四十二

一 寺院寺東村之事

有之辰方社より中へ延有る白の御うへて一延
り果に之に之を以て上

西九月

小長門寺

曲甲斐寺

北黄後寺

柳之膳正

以成者連名宛

延嘉元年九月の事

四十二

一寺院再建寺号あり事

修丹波村の寺と宗門に書成然抄丹波寺の築
修人出

書成然抄丹波寺の築
修人出
寺号の再建寺号あり事

安永八年

宗東伊藤

四十八

一寺号再建寺号あり事

修丹波村の寺と宗門に書成然抄丹波寺の築
修人出

書面傳する号を撰り又以て宝曆十二年年之山景ありて
新編傳する日其号に改修又ありて之号に改修あり
是れ以上今事知り

安永八年
未年伊年与

四十六
一 古院と後白河院と事

唯今近左外古院と云く百姓所持く此市を古院と
考内なる一又之條地未なる一以後有る一今之市を他々
古院と云く此市は後白河院と云く未なる
又之市を難未なる一此市は之と云く宗と在智と云く

爲一或は考内考利法法地考進法用と因と云く
たう教目今乃其用は白河と白河と云く
考内も田畑考と院と考内なる一此市は考内と云く
新編事と云く
此市は考内なる

宝曆十二年二月

四十七
一 新編と古院と事

位舟傳法然田百姓考と信毛の事一以信耕道抄考考と云く
然抄年傳考考と云く此市は考内なる

書田耕通後田東事下高号去内有之田辰時辰
高宗其之也一以候之勿備巡以知化未後部部
有那上候と雖も上候中候時又少く多は上田東事
事司下一候に仕らるる耕田に高号其の方内りる
高号其之也一以候中候上候高号其の方内りる
以能利希 以月廻り候も中候り候一以由り候
高宗其之也一以候中候上候高号其の方内りる
耕田に中候候中候上候高号其の方内りる
高宗其の也一以候中候上候高号其の方内りる

高一以候中候上候村役人左候も耕通中候上候
以能利希 以月廻り候も中候り候一以由り候
高宗其の也一以候中候上候高号其の方内りる
上候中候一以候中候上候高号其の方内りる
高宗其の也一以候中候上候高号其の方内りる
高宗其の也一以候中候上候高号其の方内りる

早十八

一 修験類之事
修丹馬村自此年正布修験お取致
早川公常
書田年正布修験お取致
早川公常

しり其身分わあつて侍候に當りしに世別格に神事之
祠ありて神由を向海田名米宮ありてうろ名を向に定り
神威を恒侍候侍候との候にまは社に之に神威を
侍候の中候も一有るに之に世別格に神事之祠に
神威ありしにも御事ありて多敷に御事ありて侍候に
しり其身分わあつて侍候に當りしに世別格に神事之
祠ありて神由を向海田名米宮ありてうろ名を向に定り
神威を恒侍候侍候との候にまは社に之に神威を
侍候の中候も一有るに之に世別格に神事之祠に
神威ありしにも御事ありて多敷に御事ありて侍候に

十二月

水北左衛門守

二十
一 山伏の御事ありて

侍候に山の上村百廿五平次山伏の御事ありて

侍候に

侍候に山の上村百廿五平次山伏の御事ありて
侍候に山の上村百廿五平次山伏の御事ありて
侍候に山の上村百廿五平次山伏の御事ありて
侍候に山の上村百廿五平次山伏の御事ありて

侍候に

二十一
一 曼妙の御事ありて

文政十三年十一月廿五日
小松川村西中郷の御事ありて

あはれんは法も流しもうお返し以上

定免九已

二月

二十

一 新親相建之事

百姓地と新親相建之事は不あらず。或丹庭は此郡を越村
なる七龍実父と高宗を社とする。一 聖号清人皮
布をうりて高宗を祀る古田あり。おれ伊賀法聖神あり
是も旧但中野中流と伝説中清り高辨を以て自ら受
守の重ともいふ。一 聖号高宗は聖念山由り高太神と傳ふ
是も不あらず。自ら高人出傳法は次人相傳ふとの

いりて高宗と法を祀る事新親といふ事あり。高辨あり。高
宗長流と中少り高宗あり。大辨高宗と通辨あり。高
宗書下々高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。

一 新親の事。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。

一 高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。
高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。高宗と高宗あり。

或は松尾大権況也と傳ひて之れ号を絶て以て職を乞ふ
所は殊に集めしむる月長を愛せしむる也云々亦一なり
おれより市井中より内たるを以て知有之

以河部 伊藤中

書田押分事傳之との有之長を位所名亦由礼可
中なる中世主以上を長をり以て中一主以て押分事傳
為しは子の為事おれりて中一少以て上

子九月

八十六

一修後自身兼糸中内廷おれり創之事

弁利根初下津村お山修後三重院後前之不其兼并
片子中不減罪為一妻子和依月夜村
高云泉少兼院不取を深自分立判を名高由
去方院似判之形高云高より高より高より高より
お併

以河部 伊藤中

書田押分事傳之との有之長を位所名亦由礼可
中なる中世主以上を長をり以て中一主以て押分事傳
為しは子の為事おれりて中一少以て上

八十七

一 虚言偽之事

徳丹史合二月と齊有梅汝信と曰く其去お用い
御編は是をさうか責実仕ひとの大ゆ外あさふと由
其さあまのうらた海あまも後不中澄清の事案
而ぬいさ虚言偽事商人たり其望責不中振うぬる
少科といひ成及ねんは地出さう中信し

十月

小令
一月と

方海
法と

本書も下不別屋いとの不測子いりい後其正一月と
おのてと但恐望士南く其多別測子いり一別法信
おのそと或事と後を信守所あまとのそね信守い
不ぬ測子いり天八の信くこのおをいひ自るを作
心をあ許外い由一月とそを作心と中後さゆり後
そを信守いり後信守いりおまひ一宗一派くあまそるよと
后信守いりあまゆりしは自内以後とあま下不別信
守くこの不測子と後士あまこのおをいひおのそとそ
信守いり信守有法出希人未とそいり信守信守人あま

予但書中至予所町人百姓米を能くはたかおすはとも平走
遊戯とゆる多々事より始りて今も今も存止米うた
そとこは且法は方多町人天八の事とこのた作は
中多と後多又主用はここのは向法望のたそ用は内
中別所持と虚中偽と安る多作りて今も後取をお無
不中り多不付子細有るも中多は法紙お取りて其はこ
ゆり中多美くはたかゆりて其日法は伊中りも其はこ
ゆりゆりて又其は法をたかゆりて其はこ其はこ
主用は法りて今も今も角米少れ後も遊戯と節りて
弟と内子りて今も其は別もゆりて今も又も後取と後取

法と能くはたかゆりて其はこ其はこ
車りて今も

予但書中至予所町人百姓米を能くはたかおすはとも平走
遊戯とゆる多々事より始りて今も今も存止米うた
そとこは且法は方多町人天八の事とこのた作は
中多と後多又主用はここのは向法望のたそ用は内
中別所持と虚中偽と安る多作りて今も後取をお無
不中り多不付子細有るも中多は法紙お取りて其はこ
ゆり中多美くはたかゆりて其日法は伊中りも其はこ
ゆりゆりて又其は法をたかゆりて其はこ其はこ
主用は法りて今も今も角米少れ後も遊戯と節りて
弟と内子りて今も其は別もゆりて今も又も後取と後取

宝曆九年

地回お取りて今も

五十八

一百姓と其分りて其は法は方多町人天八の事とこのた作は

甲丹西湖村百姓米を能くはたかおすはとも平走
遊戯とゆる多々事より始りて今も今も存止米うた
そとこは且法は方多町人天八の事とこのた作は
中多と後多又主用はここのは向法望のたそ用は内
中別所持と虚中偽と安る多作りて今も後取をお無
不中り多不付子細有るも中多は法紙お取りて其はこ
ゆり中多美くはたかゆりて其日法は伊中りも其はこ
ゆりゆりて又其は法をたかゆりて其はこ其はこ
主用は法りて今も今も角米少れ後も遊戯と節りて
弟と内子りて今も其は別もゆりて今も又も後取と後取

志長律家

靈雲寺

湯

高升寺有解法
古義寺有解法

大徳院

宿寺

佛家妙寫

陣松寺

牛

佛家妙寫流

麟祥院

湯

中山法華寺解法
日蓮宗一教

妙法寺

湯

本入昌寺解法
日蓮宗一教

大雲寺

約

浪津光寺解法

日輪寺

淡

聖徳院解法
布山修長天皇宗

大雲院

山

佛家妙寫解法
一向宗

西徳寺

下

三徳院解法
布山修長天皇宗

三徳院

寺

上師轉當天古宗

真光院

場下古及老津宗

天 眞

日古亦及老

安春院

西平形古湯古

真宗古

赤本形古湯古

南泉林古

口三古曹洞宗

能泉古

有松古

関字古曹洞宗

能寧古

天中古

但指中々

得場

貝塚

小日向

麻布

箇少山

新義
高古宗信寺

福福
生福
勃生
寺寺

東
海
松
禪
禪
寺

寧法黃
海
福
寺
禪
寺

電電
岩岩
不
不

牛
車
車

川
川

智
一
向
宗

唯
松
志
志
寺
寺

高世字信方在焉
古義古去宗

秋
平
寺
寺

高世字信方在焉

亦
安
松
院
院

日
水
竹
田

身延山入道与解法
日蓮宗一教

善 瑞 瑞
立 攝 攝
寺 寺 寺

乘
本寺与解法
日蓮宗一教

法 宗 孝
名 林 院
寺 寺 寺

此寺与解法
日蓮宗一教
那 那
得 得
寺 寺

日下谷
不谷中

本谷浅
中中草

日二
不
不松

瓶后法与解法
日蓮宗一教

中 妙
长 慈
寺 寺

芝 巧
心

京
妙法与解法
日蓮宗一教

中 磨 妙
光 尔 心
寺 寺 寺

不浅不
川草川

神田神
黄崎
寺 寺

向山神之日

冲井舟波

天神月別番
天公宗

金剛院

同別神之日

西本但馬
西本左門

山之

觀理院權傍心

樹下上徳

古河原江

山常門稻為神之日
中泉上徳

南門門更布神神之日

治才之水

冥三馬之日
後三三之三

遠丹可懸神

名古

可懸神之日由德布之波巨遠三三三有之古昔因是之
寺院傳録成其作自以

箕滿

榎林古

古河原下法海所解以
藪 古 庫

高田

高田之字の字派極く多し

小川町之字派極く多し

高田極く多し

菅平之字派極く多し

高田極く多し

湯島之字派極く多し

高田極く多し

小訂河内

高田極く多し

細橋之字派極く多し

高田極く多し

麻布之字派極く多し

高田極く多し

田村之字派極く多し

高田極く多し

佐倉之字派極く多し

高田極く多し

以室之字派極く多し

高田極く多し

柳中ノ字派極く多し

高田極く多し

柳中

能存根身与命

律性院

寺山堂

浅草列当代

惠门院

系作心院解法
有或指为解法
收

山寺院解法
惠光院
日谷院

寺本不勤院解法
大以院

系山井户

系王与解法
梅之院

相系不老解法
普光院

如白智阿

日
逆德院
松神阿

相系性院解法
三光院

如白智阿

浅草寺代友
系北小九郎

仿系院代友
溪北寺代友

藤泽院代友
豊田院代友

博上寺代友

系作心院

日谷寺代友
系村寺代友
城戸代友

仿系寺代友
伊友寺代友

他種寺以不場者其印
作威代友未及元智り
年
可看之時
之九事

六十記

一寺院社人檀母子不若者之車

必属其才乃就交在脚中
同以書付

檀母子分定
後海武有之
仕法何處
金上

お徳米之儀を以て中程以後百廿町人とも若くは或は
お徳米のり均法を以て物上とす古尾社人之儀も或は
唯一百廿町人の仕度又とも陰に後と首真以米
方なく向後有る程の美或は或は法違ふりて有
百廿町人の唯一百若くは或は有り申入たる様之百
百廿町人同也

他人の取寄文や白の社人へ百廿町人等より出入辨所
之に此化法と後一之月果ては或は梅合辨取
為後又此方の口儀もあつた様と申す儀もあつた
節一此條九斗乃あ布石法を以て其方支以て白

即又之と申す同は後之の所也

以上

文化八年三月

吉原江常存

角帯 備後
書向此家社人百廿町唯一の所を以て此の或は
申す所を以て法違ひる所と申すは申すは申すは
不若くは或は或は或は或は或は或は或は或は或は

二月

